私の“使い魔”さま

夢見の筆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の“使い魔”さま

【Ｎコード】
Ｎ００１９ＢＡ

【作者名】
夢見の筆

【あらすじ】
オリジナルのファンタジー小説です。少女と使い魔の交流がメインです。

イントロダクション

（イントロダクション）

広大な世界の中心に位置する魔術師の学園『セントヘイム』。
学園の中でも特に高度な魔術法式を用いる、『高等部・召喚科』…
その卒業試験は命懸けの壮絶な試験と噂されている。
名門貴族の子息もいれば、勤勉さと努力で才を磨き上げた者、天才的素質を開花させた者や、思いがけず伸び悩む者など、様々な生徒がいる中、今年の卒業試験が始まろうとしていた…

卒業試験は一年に２０名しか受けられない…そして、無事に卒業できる者はその半数しかいない…
様々な人々の思惑渦巻く苛烈な試験に向かう者の中に、一人の少女がいた…

これは、少女と使い魔が、卒業試験を乗り越えていく、愛と友情の物語…

卒業試験、始まる

「…と、前置きが長くなってしまったが…召喚科卒業試験の受験者諸君、君たちは我が学園の誇る精鋭と呼ぶに相応しい。これより半年の長きにわたり、諸君らには世界を見て回ってもらう。その旅の中で、召喚士として大切なことを学んでもらいたい。旅より戻り、一回り成長した諸君らにまた会えることを楽しみにしている。」

セントヘイム大講堂の壇上では、初老の男性―学園長ウォジー・サーン―が卒業試験に臨む召喚科の学士たちに弁をふるって立ち去っていく。

広い大講堂でその弁に立ち会う学士は若干２０名。

その中に、その少女は友達二人と供にいた…

「ウォジー学園長の相変わらず長い口上、さすがに聞き飽きてくるわね…」

ブロンドの長髪をいじりながら、女友達のクレア・シーフォートが呟くと…

「仕方ないさ。学園長としても、召喚科の卒業生が残してきた業績が、誇りなんだろうし。」

澄ました顔で青い短髪をかき上げ、男友達のマルス・フェンディが諌める。

「あ、二人とも…レオン教授が壇上に上がるよ…」

この学園には珍しい黒髪の少女…エリス・ミュールが、学園長に替

わって壇上に上がっていく召喚科の教授の姿をとらえる。

「学園長より話があったとおり、これより皆さんには召喚の間に行っていただき、それぞれ使い魔を喚び出し、契約を行ってもらいます。その使い魔と供に、半年の長旅をしてもらいます。学園からの援助は最初に渡す支度金のみです。道中の旅費は、各地にあるギルドのクエストをこなし、ギルドから報酬を得るように。旅の途中で試験続行が不可能になったと判断した者は、自己申告で辞退を申し出ること。以上が連絡事項です。何か質問はありますか？」

卒業試験の開始が目前に迫り、場に緊張感が漂う…

質疑応答のためにレオン教授が学士たちを見渡すが、挙手する者はいなかった。

「では、卒業試験受験者諸君…召喚の間に移動しましょう。」

召喚の前に…

薄暗い部屋の中に入っていくと、漆黒に塗り潰され間た床の中央に複雑怪奇な魔法陣が描かれている…
この部屋こそ、召喚士が使い魔を召喚するための部屋…召喚の間である。

「さて、皆さん既に習っているとは思いますが、使い魔を召喚し、契約するまでの流れを確認しておきましょう。」

レオン教授が受験者を見渡す。
召喚科の卒業試験の受験資格は、召喚術概論と召喚術応用論、そして世界学基礎の三つの講義において、認定試験を受け、全て全問正解すること…
つまり、今からレオン教授が話す内容は、彼らにとって何度となく復習してきた内容なのである。
「まず、召喚の方法ですが…初期契約召喚と契約使者召喚では法式が異なります。皆さんがこれから行うのは、初期契約召喚…大掛かりな魔法陣を展開し、異世界から自分の魔力指向に見合った使者を引き出す召喚です。異世界にいる数多の生物から一つの使者を探し出すため、膨大な魔力を消耗します。そうして喚び出した使者との契約ですが…」

「使者の名を問い、契約のコードを読み上げ、魔力の相互授受を行い、魔力線を召喚者と使者の間に結ぶ…そうだろう？」

すぐにでも召喚を始めたいのか、苛立ちながら受験者の一人、シュレイ・ミンストンがレオン教授を見返す。
しかし、話の腰を折られたことをレオン教授は何ら気に留めず、淡

々と話を続ける。

「その通りです。召喚者と使者の間に結ばれた魔力線は契約が切れるまでは消えません。契約は召喚者が契約破棄のコードを読み上げるか、どちらかの生命力、または魔力が尽き果てるまでは継続します。」

レオン教授の回りくどい言い方でも、受験者には十分伝わっていた。すなわち、契約した以上、契約破棄の呪文を使者にかけるか、召喚者か使者の命か魂が尽きるまで…死ぬまでは契約が続くということ。

「使者は皆さんの大切な相棒となります。召喚と契約に使った魔力が回復するまでの間に、十分コミュニケーションを取ってください。では…お待たせしました。受験者は番号順に並び、一番の者は魔法陣の中に入りなさい。」

そしていよいよ、使い魔の召喚が始まる…

使い魔さま、現る

「次は…シュレイ君の番だ。」

一人、また一人と順調に召喚と契約を行っていき、残るは二人だけとなった。
その二人とは、召喚を行う順に、シュレイ・ミンストン、エリス・ミュールである。
名を呼ばれたシュレイは魔法陣の内側へと歩いていく…

「では、シュレイ君…召喚術の詠唱を。式典口上は間違えないように。」

「分かってるさ…」

レオン教授を横目に、シュレイは目を瞑り、己の魔力を極限まで解放していく…心臓が血液を作り出して全身に送るように、魂が魔力を作り出して精神の補強をする。
ゆえに魔力は精神力とも称され、心の在り方が魔力指向を決めるものとなる。
博愛主義者なら心優しき使者を、残虐な心の持ち主なら相応に冷酷な使者を…それぞれの魔力指向に合った使者が喚び出される。

「コール（我は喚ぶ）！サモン、サーヴァント！（来たれ、我が使者よ）」

シュレイを中心に魔法陣が光り輝き、異世界の門がひらく…
逆行の中から出てきたのは、長い茨のツタを幾つも有する巨大な植物だった。

「契約の儀に従い、問う！その名、マンイーターに相違ないか！応ずるならば我と魔力の交換を行え！我は契約者、シュレイ・ミンストンなり！」

契約のコードを読み上げ、シュレイとマンイーターの身体から淡い光が粒子となり舞い上がり、互いの魂を結ぶ線…魔力線が形成される。

召喚科の学士が世界論、その中にある魔物知識を学ぶ理由の一つは、喚び出した使者との契約に名を呼ぶ必要があるためである。

「ふぅ…じゃあな、仲良し三人衆。もっとも、そのうち一人は召喚に失敗して脱落しそうだがな！」

エリスを一瞥すると、シュレイは笑いながら召喚の間を後にした。

クレアは火トカゲのサラマンダーを従え、マルスは天馬のペガサスを従えながら、エリスにエールを送る。

「大丈夫よ、エリス…あんなトゲトゲ頭の言うことなんて気にしないで」

「入学当初、エリスはいまだかつて無い魔力指向の持ち主だと言われていたんだ…たとえ今までどの魔術にも適性が無かったとしても、今回はきっと…」

「うん。ありがとう、二人とも…行ってくるね。」

受験者最後の召喚を行うため、エリスが魔法陣の中に足を踏み入れる…

すると魔法陣は黒い光を放ち出すのであった。

その異様さにレオン教授すら見とれているうちに、エリスが召喚を

行う。

「コール！サモンサーヴァント！」

直後、召喚の間を微弱な揺れが襲い、黒く輝く魔法陣から六本の魔力の固まりが外界へと凄まじいスピードで飛び出していく。

「これは…暴走とも違う…だが…有り得ない…これほどの魔力の波動…いったい、何が…」

レオン教授が目を細めて魔法陣の中心を見ると、エリスの他にもう一つの人影があった。
肩まで届く漆黒の髪…見るものを畏怖させる深紅の双眼…
いわばそれは覇王の風格にして、神にも近い畏れ多さであった。
意を決して、エリスは目の前の強大な存在に語りかける。

「あなたは…いったい…」

「転移の際に歪みができたか…とは言え…我が名はケイオス。俺を呼び寄せるとは大したものだな、小娘。」

男は不敵に、エリスを見下ろしていた…

主従の契約

「あ…えっと…」

ケイオスと名乗る使者の在り方は、あまりにも想定外であった。
人型の使者を召喚できる者がいないわけではないが、ここまで人間そのものの姿形をとっている使者は希少であり、それ以上に自ら話すことのできる使者など、十年に一度現れるかどうかというほどの希少さである。

「すごい…私たち学士には召喚できないはずの特ＡかＳランクの使者よね…あれ…」

呆然と魔法陣の中心を見ていたクレアが呟く。
使者はその魔力の強さ、知能の高さの総合点により、ＡランクからＥランクに分けられる。
しかし、言語を理解し、会話を交わすことができる使者はＡランクより更に上位の知能を有するため、特Ａランクと呼ばれる。
そして、特Ａランクより上位…固有名称を有し、Ａランクの使者でも太刀打ちできないほどの力を持つ者をＳランクとしており、上級魔族や魔神、英雄や精霊の類がそれに該当する。

「どうした、小娘？喚び出すだけ喚び出して、何も告げないとあっては、俺も困るのだがな。用件は…雰囲気からすると、主従の契約か？」

ふう、と息を吐き出すと、ケイオスは多少纏っていた雰囲気を和らげ、改めてエリスを見下ろした。
見下ろしたというのも、彼我の身長差ゆえであり、ケイオスとして

は意図してやっていることではない。
ケイオスの背丈は１８０センチ程度だが、かたやエリスの背丈は１５０センチ程度しかないのである。

「はい、契約を…ええと…契約の儀に従い、問う。その名、ケイオスに相違ないか。応ずるならば我と魔力の交換を行え。我は契約者、エリス・ミュールなり。」

「名はエリスか…契約者エリスよ…我を従えんと欲するならば、我が魔器を取り戻すことを誓約せよ。さすれば我が力は汝を守る盾となり、道を切り開く剣となろう。」

「え…？魔器…って…？」

「俺が現れる前に、六つの魔力の固まりが発現したはずだ…門が狭くて飛び散っていったみたいでな…あれがないと、本来の力を発揮できないのさ。探してくれるか、エリス。」

これから半年の旅に、明確な指針ができるなら、それはエリスにとって悪い話ではない。
そう思い、魔器の捜索がどれほど大変で、命懸けの旅になるかも分からないまま、エリスはケイオスの提示した条件を受諾した。

「分かりました…ケイオスさんの言う六つの魔器を探します。契約を…」

「いいだろう…魔族の王、ケイオス・ブルームの名に誓い、今この時よりエリス・ミュールの従者となろう。」

ケイオスの宣誓と共に、エリスとケイオスの間に魔力線が結ばれる。

魔術の使えない落ちこぼれの少女と、少女と同じ黒髪の魔王…
こうして、少女と魔王のペアによる卒業試験が始まるのだった。
……無論、ケイオスが魔族の王と名乗ったことにより、召喚の間の中は大騒ぎとなっていた……

魔器

最後に一騒動あったものの、無事にエリスも契約を完了させ、召喚に使った魔力が回復するまでの期間、学士寮の自室に戻ることになった。
クレアとマルスも同じく学士寮に戻るのだが、マルスは貴族の出身であり、クレアとエリスとは別の宿舎に住んでいる。

「それじゃあ、二人とも…今日はゆっくり休んで、お互い消費した魔力の回復に専念しよう。」

「ええ、パートナーとのコミュニケーションでもしているわ。」

「お休みなさい、マルス君。またね。」

召喚とは世界の隔たりを取り払い、自分が求めるものを…それが本当に欲していたものかどうかは別として…強制的に呼び寄せる術である。
喚び出す対象に応じて魔力の消費量は変化するものであり、場合によっては法式に乗っ取り儀式を要するものもある。
今回の『初期契約召喚』に使う魔力量は、『開門』『探索』『転移』『真名契約』『魔力結束』『閉門』と六項目の大掛かりな手順を必要とするため、所有する魔力の九割を用いる。
魔術学園のような魔力の高まりがあるような場所であっても、それだけの魔力量を取り戻すには、三日はかかるのが普通である。

「ここが私の部屋です…とりあえず、入りましょうか…」

契約を交わしてから、ずっと黙って一歩後ろをついてきたケイオス

に、エリスは入室を促した。
しかし、ケイオスは入口のドアを見つめたまま、物思いに耽るようにしており、歩きだそうとしない。

「あの…ケイオスさん…？」

「ん？あぁ、すまないな…魔器の行方を探るのに没頭しすぎたようだ。」

エリスに名を呼ばれて、ようやくケイオスはエリスが開けてくれたドアの先へと足を踏み入れていく。
その後に続いて、エリスも自室に入っていき、ドアを閉める。
ケイオスに聞きたいことは色々あるのだが、室内の椅子に座りながら、静かに魔器の行方を探る行為を再開したのを見ると、なかなか声がかけられなかった。

「終わるまで…邪魔しないほうがいいですよね…」

誰に言う訳でもなく、エリスは小さく呟きながら対面の椅子に腰掛ける。
ふう、と小さく息を漏らして顔を上げると、対面のケイオスはエリスと真っ直ぐに目を合わせた。

「マスターに気を遣わせるとあっては、従者として失格だな…すまない、エリス。何か聞きたいことがあるみたいだな？」

凍るような冷たい瞳を持ちながらも、ケイオスはエリスに対してできるだけ優しく接していた。
それが主従の契約を結んだ為かどうかは今のエリスには判断できないものであった。

「あの…ケイオスさん…六つの魔器を探すって言ってましたけど…魔器っていうのが何なのか、教えて貰えませんか？」

「ふむ、そうだな…一言で言い表すならば、魔器とは膨大な魔力の結晶…ただそれを持つだけでも、様々な力を得ることができる、アーティファクト（神の遺物）のようなものだ。」

「アーティファクトのようなもの…というと、アーティファクトと魔器は何か違いがあるということですか？」

「その成り立ちが異なる。アーティファクトは最初から奇跡を起こす代物として創られているが、魔器は長い年月を経て、人々の願いを魔力として受け取り、力を持った装具だ。」

「そうなんですか…じゃあ、ケイオスさんが持っていた魔器を誰かが悪用したら…」

「おそらく、世界に混乱を招くことになる…幸いにも、魔器の一つは近くにあるようだが、残る五つは世界各地に散っているみたいだな…」

深刻そうに言うケイオスを見ると、エリスにも魔器がどれだけの力を有しているか察することができた。

「明日になったら、街に出てみましょう。近くにあるなら、何か異変があるかもしれません。」

「そうだな…魔器の一つ、ミストルティンを失った今、かわりの剣も必要だ…すまないが、明日は案内を頼む。」

「はい。それじゃあまた明日…お休みなさい、ケイオスさん…」

都市に潜む異常

翌朝…身支度を整えたエリスは、ロフトで寝ているケイオスが起きてくるのを待っていた。
一晩経ち、少しは魔力が回復したとはいえ、まだまだ全快には遠い状態にある。
本当なら他の受験者と同じく、今日明日は学内で大人しくして、魔力の回復を待つべきなのだが…

「はあ…どうせ私は魔術は使えないし…だったら魔力の回復を待たなくても同じだよね…」

落胆して溜息をついていると、ロフトからケイオスが降りてきて、エリスに手を挙げ、軽く挨拶する。

「朝から随分と落ち込んでるようだな…悩み事を抱えすぎるのは、精神衛生上好ましくないぞ。」

「おはようございます…いつものことだから、気にしないでください…」

「そうか、なら何も言うまい。剣の調達と魔器の捜索に行く準備は、もうできているか？」

「はい、行きましょう。このセントヘイム学園の正門から街道を歩いて、１０分くらいでセントラルシティの入口です。」

寮の部屋から出て、昨日と同じようにケイオスはエリスの一歩後ろに付き従うようにして歩いていく。

そんな姿を見ていると、エリスは自分が喚び出したのが本当に魔王なのかと疑問に思わざるをえなかった。

「あの…ケイオスさん、失礼なことを聞きますけど…本当に魔王なんですよね？」

「契約の時にそう名乗りを上げたはずだが…何故、そんなことを聞く？」

「いえ…どうして私なんかが喚び出せたのか、とか…なんで一歩後ろを歩いているのかな、とか…」

「前者に関しては、エリスの魔力指向が俺と繋がっていたからだ。後者に関しては…恥ずかしい話だが、道が分からんだけだ。」

エリスのささやかな疑問にも、ケイオスは嫌な顔一つせず、すらすらと答えを提示する。
魔王とはまがまがしく、暴威と恐怖の象徴…と教わっていたのが、呆気なく崩れ去るくらいに、ケイオスは気さくだった。

「ふふっ…ケイオスさんって、ちょっと面白いんですね。」

「何か含みのある物言いだが…それでエリスのそういう可愛らしい表情が見れるなら、安いものだな。」

「なっ…わっ…私なんか…可愛くなんかっ…」

エリスが見せた笑顔を、ケイオスは相変わらず平然としながら、可愛いと評する。
しかし、言われたエリスは大慌てで、ケイオスの評価を訂正しよう

としていた。
結局、学園の正門に着くまで、二人は可愛いかどうかの議論を繰り返し…真っ赤になったエリスが黙ってしまったことで、ケイオスの勝ちとなった。

セントヘイム学園は後方を山脈に覆われ、正門からなだらかな坂道を下ると、大陸中央の大都市セントラルシティにたどり着く。
セントラルシティはセントヘイムと繋がる南門、港町シーサイドと繋がる北門、大陸西部の砂漠へと繋がる西門、商業都市やギルドが点在する大陸東部に繋がる東門の四方へ繋がる中継都市である。
また、セントラルシティは街の四分の一がスラム街となっており、西門方面は小規模の治安部隊が常時三名体制で駐留している。

そんなことをケイオスに説明しながら歩いていくと、南門では何やら検問らしきことが行われていた。
物々しい雰囲気に、エリスもケイオスも少し離れた場所で立ち止まり、様子を見ていた。

「あれも、いつものことなのか？」

「違います…何か街の中であったのかも…」

「行かなければ分からない、ということか…」

覚悟を決め、二人が門に近づくと、検問官が身なりを見て、名前を尋ねてきた。
エリスはケイオスを突然変異の使い魔だと必死に説明して、何とか検問官に納得してもらった。

「あの…こんな検問をされるなんて…何かあったんですか？」

エリスは先程まで険しい顔でこちらを見定めていた検問官に問う。
何かの異常があれば、それが魔器探索の手がかりになるかもしれない。

「ああ…昨夜、スラム街で一騒ぎあってね…殺人鬼が出たんだよ。
治安部隊が、やられていた…」

ありえない話だった。
装備も能力もしっかりとした治安部隊が、ただのスラムの暴徒に負けるはずがないのだ。
しかも、負傷するくらいまでならまだ分かるが、今回の騒動は死傷…

「エリス…魔器の反応が近い…剣の調達を終えたら、スラム街とやらに行くぞ…いいな？」

「はい…行きましょう…ケイオスさん…」

検問官に門を開けてもらい、二人はセントラルシティに足を踏み入れるのだった…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0019ba/

私の“使い魔”さま

2012年1月6日17時47分発行